

認知言語学的観点から多義語の意味記述を考える

——英単語 *trap* を例に——*

貞 光 宮 城

On Semantic Descriptions of Polysemous Words from a Cognitive Linguistic Viewpoint : A Case Study of *Trap*

Miyagi SADAMITSU

1 はじめに

パソコン性能の飛躍的な向上により、言語分析も様変わりを見せた。コーパスの構築とそれに基づいた出現頻度による分析である。意味記述にもこの頻度による分析が導入され、辞書においても用例の出現頻度順に意義が記載されるものも現れた（『ロングマン英和辞典』他参照）。

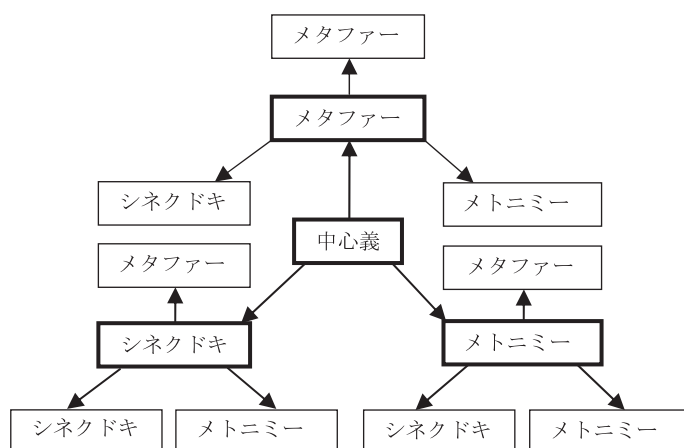
しかしこれにはいくつかの問題がある。最も大きな問題点は、出現頻度順に記載された語の全体的な意味をつかみにくいということである。となると、その語を習得していく際にも、とても有益であるとは言えなくなる。頻度順に切り刻まれた意義の羅列では、記憶の認知地図上のどこに配置し、どのような関連からその意義を引き出すかは至難の業となろう。また、辞書の記述に限って言えば、頻度順に記述することによって、より早く目標となる意義を見つけることができると考える向きもあるかもしれない。が、果たしてそうであろうか。全体像がつかめないうちにより早く当該文脈における求める意義にたどり着けるか甚だ疑問である。

本稿では、認知言語学的観点から多義語の意味記述のあり方を検討する。事例研究として多義語 *trap* を取り上げ、頻度順に意義を羅列する方法では捉えられない、意義間の有機的なつながりを明示する意味記述を目指す。本稿の構成は、まず2節で意味ネットワークの記述を目指した基本方針を述べる。次に3節で実際にその方針に基づいて多義語 *trap* の意味記述を行った事例を提示する。その意味記述の意義を4節で考察し、特に、英語母語話者の心理的实在の記述に関する点と、英語学習者にとっての有用性について論じる。5節はまとめである。

2 記述方針

意味記述の事例研究を行うにあたり、原則として『英語多義語ネットワーク辞典』の意味記述方針に従うものとする。まず、共時的な立場に立って多義語の中心義を定める。そしてその中心義を起点とし、意義展開パターンによって各意義を明示的に関連づけ、個々の意義を大きな意義のまとまりの中で体系的に記述することを目指す。

ここで、意義展開パタンの基盤となるのが、メタファー (metaphor、隠喩)、メトニミー (metonymy、換喩)、シネクドキ (synecdoche、提喩) である¹⁾。この方法に基づいた意味ネットワークのモデルを以下に示す。



(『英語多義語ネットワーク辞典』(2007: 5); 瀬戸 (2007: 41))
 〈Figure〉 意味ネットワーク

この図では中心義から放射状に意味のネットワークを形成する様子が描かれている。もちろんこれはモデルであり、この語によってはこの一部分だけが実現する場合もあれば、同時に多岐にまた3次元的にネットワークの広がりを見せる場合もある。

3 多義語の意味記述

3.1 出現頻度に基づいた意味記述

事例研究として多義語 *trap* の意味記述を考える。まず、比較のため、言語コーパスでの出現頻度に基づいたこの語の意味記述をここに挙げておく。

(1) 出現頻度に基づいた意味記述：

trap¹ 名詞 可算

- 1 (動物を捕らえるための) わな、捕獲器
- 2 (人を陥れるための) わな、計略、策略
- 3 苦境、八方ふさがり
- 4 fall into the trap of doing something (…) するという過ちを犯す
- 5 (配水管の) トラップ (U 字形などの湾曲部)
- 6 (屋根・天井・床などの) はね上げ戸
- 7 (ゴルフ場の) バンカー
- 8 (他の名詞を伴って) …がたくさんある場所・物、…を集める場所・物
- 9 (サッカーで) トラップ、トラッピング
- 10 (昔の) 軽装二輪馬車
- 11 (ドッグレースの) (スタート) ゲート

(『ロングマン英和辞典』 s.v. *trap*¹ ただし用例を除く)

ここで同辞典はこの出現頻度順による意味記述の利点として、こうすることで「もっとも一般的な意味はどれか、すなわち、覚えるべきいちばん大切な意味はどれかが一目でわかる」(『ロングマン英和辞典』「イントロダクション」ix) とし、さらに「辞書を使う人がある語の意味を探する場合、当然、もっとも頻度の高い意味を探している確率が高いので、その意味を迅速に見つけることも容易」(ibid.) になるとも指摘している²⁾。

確かに、辞書としての実用上の一側面においては、指摘の通りの場合もあるかもしれない。しかしながら、ここで問題にしたいのは、その語自体の意味記述としての妥当性である。その語が持つ各意義の関連性がどうなっているか、さらにはその語が持つ意味の広がり全貌をとらえられるよう記述する必要はないのか、またそのことによって辞書使用者への利点があるのではないかという点である。

3.2 意味ネットワークに基づいた意味記述

次に、2節で示した方針に沿って、同じく多義語 *trap* の意味記述を意味ネットワークに基づいて行ったものを提示する³⁾。

(2) 意味ネットワークによる意味記述：

trap¹ 名詞 可算

- 1 (鳥獣を捕まえる) わな、落とし穴

- 2 (入れるが出られない) 扉の仕掛け, その扉; はね上げ戸, 落とし戸, 引戸, 引窓;
(ドッグレースの) 出走ゲート; 奈落
 - 2a [射撃] 標的飛ばし, 放鳥機; 射撃競技の種類; (球技 *trap* [and] *ball* で用いる)
ボールをトスする仕掛け
 - 2b (はね上げ戸などが覆う) 穴; (衣服の) かぎ裂き, その穴; (銃の) 床尾内部の
空間; (鉱坑の) 通風口; (人の) 口
- 3 (S [U] 字形パイプの) 防臭弁, 排水管; (管などが詰るのを防ぐ) 不要物除去装
置, トラップ
 - 3a [通信] (混信・妨害電波を防ぐ) 共振回路, ウェーブトラップ
 - 3b [コンピュータ] 割り込み, トラップ
 - 3c (ゴルフの) バンカー
 - 3d [野球] トラップ (グラブの親指と人差し指間の網状部)
 - 3e [野球] ショートバウンドの捕球; [サッカー] ボールを受け止めその勢いを弱め
る動作, 捕球, トラッピング
- 4 (人を陥れる) わな, 策略, 計略
 - 4a わなを仕掛けて捕まえる人, 巡査, 探偵
 - 4b (スピード違反を取り締まる) 監視所 [網, 区間]; (レースの) 速度計測地点
[コース]
 - 4c (サッカーやアメフトなどの) 作戦, トラップ戦法, マウストラップ; (チェス,
囲碁などの) はめ手
 - 4d (わなにかかったような) 困難な状態, 八方塞がり, 苦境
 - 4e (自らわなにかかるような) 過ち, 愚行
- 5 (人・物がわなにかかるように) 集まる [溜まる] 場所, (客をだましてぼったくる
ような) 安酒場, 飲み屋, [地質] 石油やガスが溜まっている地形, [物理] 電子 [正
孔] トラップ
- 6 (ジャズバンドの) 打楽器類
- 7 (昔の) 軽装二輪馬車

一見すると、(1) と (2) の違いは大してないように思われる⁴⁾。(2) の意味記述がどのよう
にネットワークをなしているか概要を解説すると以下ようになる。

(3) *trap*¹ の意味ネットワーク:

1 中心義

- 2 中心義からの特性類似によるメタファー
 - 2a 意義 2 からの類で種を表すシネクドキー
 - 2b 意義 2 からの全体で部分を表すメトニミー
- 3 中心義からの特性類似によるメタファー
 - 3a 意義 3 からの機能類似によるメタファー
 - 3b 意義 3 からの機能類似によるメタファー
 - 3c 意義 3 からの機能類似によるメタファー
 - 3d 意義 3 からの機能類似によるメタファー
 - 3e 意義 3 からの特性類似によるメタファー
- 4 中心義からの特性類似によるメタファー
 - 4a 意義 4 からのプロセスで行為者を表すメトニミー
 - 4b 意義 4 からのプロセスで場所を表すメトニミー
 - 4c 意義 4 からの類で種を表すシネクドキー
 - 4d 意義 4 からのプロセスで結果を表すメトニミー
 - 4e 意義 4 からのプロセスで原因を表すメトニミー
- 5 中心義からのプロセスで場所を表すメトニミー
- 6 関連性不詳
- 7 関連性不詳

この (3) を上掲の〈Figure〉に沿って図示すれば、中心義から各意義が（具体物から抽象物へと）放射状に広がる意味のネットワークをなしていることがわかる⁵⁾。ここで注意しておく点は、(3) では便宜上中心義から他の意義へという一方向の意味拡張のみを表示しているが、実際はその拡張によって生じるネットワーク関係は立体的かつ多岐に及ぶ。例えば、意義 2a と意義 3 は特性類似によるメタファーでつながり、さらに意義 3 は意義 5 とともに道具で結果を表すメトニミーでつながっている。こうした関係が立体的に柔軟かつ流動的に網目状に相関し合って全体を成している⁶⁾。

次節ではこうした意味記述が、出現頻度に基づいた (1) のような記述に比して、どういった利点が考えられるかを考察していく。

4 考 察

「一体 (2) のような意味記述に何の意味があるのか」と訝しがる向きもあるかもしれない。(1) の出現頻度に基づいた意味記述を紹介した際に引用したように、調べている意義がより速

く見つけられるのであればそれに越したことはないのではないか、という立場である。本節では、(2) のような意味ネットワークによる意味記述の利点を、特に、英語母語話者の心理的実在の記述に関する点と、英語学習者にとっての有用性という 2 つの点について論じる。

4.1 英語母語話者の心理的実在としての意味記述

英語母語話者の有する、ある単語の意味についての心理的実在がどのようなものであるか、あるいはそれをどのように記述するのが適切かということを考えた場合、(1) のような出現頻度に基づいた意味記述よりもはるかに (2) のような意味ネットワークによる意味記述の方が、その実状を記述しているのではないかと考えられる。

認知言語学的観点から考えると、経験主義的な用法基盤言語習得モデルに与すれば、母語話者の習得する言語は、その話者の言語使用経験から抽出され、それが慣習化されてきた、言語単位の集まりから成っていると想定されている (Langacker (2008) 他参照)⁷⁾。この立場から (2) の意味記述を考えれば、母語話者 (言語学習者) が様々な言語経験に基づいて獲得していった言語単位から、スキーマを抽出し、それに照らし合わせてさらなる言語単位をスキーマからの拡張というかたちで獲得していく様子こそが、この (2) の意味記述に表れていると考えられるのである。

当然のことながら、(2) の意味記述のすべてが (つまり辞書に記載されていることの丸ごと全てが!) 母語話者の頭の中に刻まれているというようなことを述べているのではなく、またそのようなことが現実的ではないことは自明である (山口 (2001) 他参照)。さらに、個人個人によってもある 1 つの語から喚起する意義は厳密には同一ではないのが現実である。ここで述べたいのは、母語話者の心理的実在として単語の意味はネットワークを成しているということであり、(2) の意味記述がその潜在的な広がり様子を記述しているという点である。

つまり、(2) のようなネットワーク状の意味記述が、話者が獲得しうる意義全体の潜在的可能性を示していると言える。ただし、話者によってそのネットワークの網目が異なり、ある話者にとってはつながりを持つ意義が別の話者にはつながりを (未だ) 持たないという状況が起こりうるのである。例えば、ある話者はある語のある意義の語源を何かのきっかけで知りえたとするとそのネットワーク上のつながりは強化され顕在化するが、そういう言語経験がない話者にはそのネットワーク上のつながりは (潜在的には存在しても) 未だ実現していない状態であると言える。

これはちょうど「図と地の反転図形」を見た時の経験と同様の現象が潜在的に隠れていると考えられる。有名なウサギ／アヒルの反転図形を例として説明すると、ある人にとって最初はウサギにしか見えなかった図が、(他の人から教わる等の) 何らかのきっかけによってその図がアヒルにも見えることを知った途端、その図という記号から喚起される意義は以前とは全く

違ったものとなる。つまり、その当人にとって今正に新たな意味のネットワークがそこに形成されたように思える。が、その図（記号）の背後には元々多義ネットワークを形成しうる潜在性を秘められていて、そのことに新たに気付気、その人の意味ネットワーク上の1つのリンクがそれを契機にして顕在化したに過ぎないと考えられる。

ネットワーク状の意味記述に話を戻すと、(2)の意味記述は1つの図形をみてウサギにもアヒルにも見えるという多義の潜在性を示しているのもであって、繰り返しになるが、この(2)の意味記述すべてが話者の記憶に刻まれている訳ではない。何らかのきっかけによってそれらのつながりが顕在化されたり強化されたりする可能性があるということを示しているのである。

この意味で、多義ネットワークによる意味記述の方が出現頻度に基づく等の他の意味記述よりも母語話者の心理的実在をはるかに現実に近いかたちで記述していると考えられるのである。

4.2 英語学習者にとって有益な意味記述

前節でも述べた認知言語学的な観点から言語の習得過程を考えると、(2)に示したような意味のネットワーク状の記述がいかに学習者にとって有益かがわかる。学習者は、本来、言語使用の実例に数多く当たり、学習者が個人的に意味ネットワークを構築していき、語の意義を部分的かつ全体的に習得していつているはずである。(2)の意味記述はその過程全体を提示しているのであるから、学習者は個々の言語経験を1つひとつ自分で踏むことなくその語の意味の全体的広がり把握することができ、当然、このことが学習者自身の持つ意味ネットワークを広げていく上で、非常に学習しやすくなっていると考えられる。

出現頻度に基づいた意味記述ではこうしたことは期待できない。記載された語の全体的な意味をつかみにくいからである。よく使われる意義こそが重要な意義であるという発想であろうが、その語の意義の全体像がつかめないまま、本当により速く当該文脈における求める意義にたどり着けるのであろうか。そこで経験している、文脈に即した意味を学習者が見つけていく作業こそ、上述の学習者自身が個々の言語経験を1つひとつ積み重ねて意味のネットワークを広げていつていることではないだろうか。そうすることによって、学習者はその語の意味の全体像を自分で再構築しているのではないだろうか。

瀬戸（2008）には「頻度順に基づく意義配列は、辞書ごとに程度の差はあっても意義のまとまりを寸断し、多義語を意義のごた混ぜサラダとして読者に差し出す」（瀬戸（2008：4））という厳しい指摘もある。サラダの例えをさらに借用するならば、1皿のサラダを盛りつけするのにお客に人気がある材料順に並べておいて、そこから一品仕上げる方が効率がいいのか、サラダを作る中心的な素材から配列し、その次にそれと関連するトッピング類を並べていき、全

体としてどんなサラダを作ろうとしているのかを見渡せるような配列の方が有益なのか、ということになるか。学習者にとって本当に有益な意味記述とは、やはり、頻度順に切り刻まれた意義の羅列ではなく、その語の意味の全体像が見渡せるような配列で、1つひとつの意義がどう関連しているかが見通せる意味記述であるべきである。そうであればこそ、学習者がその語の意味のネットワークを構築するという言語習得において、極めて有効にその意味記述が役に立つのである。

5 おわりに

本稿では、認知言語学的観点から多義語の意味記述について論じた。事例研究として英単語 *trap* を取り上げ、その各意義が有機的につながり、放射状にネットワークを成す様子を示す方法で意味記述を行った。それを出現頻度順に意義を配列する意味記述と比較し、英語母語話者の心理的実在をどのように記述するかという点と、英語学習者にとってどのような意味記述が本当の意味で有益かという点について論じた。

認知言語学的観点から意味記述を考えた場合、多義語 *trap* を例として(2)に示したような、中心義から各意義へ放射状に広がるネットワークを成す意味の全体像を記述する方法が極めて有効である。これは英語母語話者の心理的実在とも合致し、ネットワーク状の意味記述が、話者が獲得しうる意義全体の潜在的可能性を示していることを述べた。さらに英語学習者にとってどのような意味記述が望ましいかという点についても、ネットワーク状の意味記述であれば、その語の意味の全体像が見渡せ、1つひとつの意義がどう関連しているかが見通せるため、学習者がその語の意味のネットワークを自分の頭の中に構築するという言語習得において極めて有益であることを述べた。

冒頭にも述べた通り、パソコン性能の向上に伴い、単語の意味を出現頻度順に配列する辞書はすでに多数発刊されている。今後は、本稿で示したような意味のネットワークによる意味記述を実際に採用した辞書が早くそして(様々な英語力の学習者を対象とし)多数発刊されることが期待される。それらを実際に使用した方々から、学習者としての立場での意見をぜひとも求めたい。そこで再度、本稿の論点を検討する必要があるだろう。

註

*本稿は瀬戸賢一先生に研究の契機を与えていただいたことによる。記して感謝の意を表したい。

1) 意義展開バタンの基盤のそれぞれについて詳細は瀬戸(2007)他を参照。

2) 当然のことながらここに挙げた辞典のすべてを否定するつもりなど毛頭ない。現に同辞典の用例の適切さやそれに対する日本語の自然さは、筆者などが指摘するまでもなく、極めて信頼できるものとなっており、その評価も高い。

- 3) (1) と同様に各意義に対応する用例等は省略しておく。
- 4) (1) に比べて (2) の方が記述内容も多く豊富になっている。(1) はある 1 つの辞書の記載事項をそのまま引用したにすぎないが、一方 (2) は筆者が様々な辞書の記載事項を照らし合わせ、英単語 *trap* の意味記述を目指したものであるからである。この (2) のすべてをある 1 つの辞書の記載事項として提案しているわけではない。そのようなことは 1 つの辞書を編纂する上で紙幅の面からも物理的に現実的とは思われない。必要十分な多義展開のボタンに関して、瀬戸 (2007: 49) においてもその多義展開の細分の精度について「どのあたりの精密度がちょうどいいかは、先験的には決まらず、多くの実例を分析することによって、正確さと分かりやすさを天秤にかけるという作業をしなければならない」と指摘されている。
- 5) ただし、ここでは紙幅の関係もあり、その図を示すことは控える。また意義 6 および 7 については、それぞれの語源をはじめとする調査・分析を行っても、それらの意味ネットワーク上での関連性は見いだせていない。
- 6) インターネット上の辞書 *Visuwords™ Online Graphical Dictionary* ではこの関係を立体的に図示しようとしている。
- 7) A language comprises an enormous inventory of conventional linguistic units, all abstracted from usage events.
(Langacker (2008: 221))

参考文献

- Gibbs, Raymond W. (1994) *The Poetics of Mind*, Cambridge University Press.
- Goossens, L (1990) "Metaphonymy: The Interaction of Metaphor and Metonymy in Expression for Linguistic Action," *Cognitive Linguistics* 1: 323-340.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*, University of Chicago Press.
- Lakoff, George, Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Concept, Image, and Symbol*, Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2000) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic Categorization, 3rd Edition*, Oxford University Press.
- 赤野一郎 (2008) 「辞書編纂におけるコーパス利用」『英語青年』3月号: 10-12.
- 池上嘉彦 (1978) 『意味の世界－現代言語学から見る－』NHK 出版.
- 小島義郎 (1999) 『英語辞書の変遷』研究社.
- 小森道彦 (2002) 「多義語の記述とコロケーション」『英語青年』4月号: 40-41.
- 佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚』講談社.
- 佐藤信夫 (1981) 『レトリック認識』講談社.
- 佐藤信夫 (1996) 『レトリックの意味論』講談社.
- 瀬戸賢一 (2000) 「多義語の記述に向けて」2000 年 11 月. 日本英語学会第 18 回大会 (於甲南大学).
- 瀬戸賢一 (2007) 「メタファーと多義語の記述」楠見孝編『メタファー研究の最前線』ひつじ書房, 31-61.
- 瀬戸賢一 (2008) 「意味への回帰」『英語青年』3月号: 2-5.
- 瀬戸賢一, 山口治彦, 武田勝昭, 小森道彦 (2000) 「多義語の記述: 理論と方法」2000 年 11 月. 日本英語学会第 18 回大会 (於 甲南大学).
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開－メタファーとメトニミー』研究社.
- テイラー, ジョン・R, 瀬戸賢一 (2008) 『認知文法のエッセンス』大修館.
- 深田智, 仲本康一郎 (2008) 『概念化と意味の世界－認知意味論のアプローチ－』研究社.

松本曜 (2003) 『認知意味論』大修館.

南出康世 (1998) 『英語の辞書と辞書学』大修館.

南出康世 (2008) 「理想の英和辞典を求めて」『英語青年』3月号: 15-17.

山口治彦 (2001) 「多義を記述するために―多義構造と辞書記述のテキスト構造―」『神戸外大論叢』52. 2: 62-91.

山梨正明 (1988) 『比喩と理解』東京大学出版会.

山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版.

辞典

Cambridge Advanced Learner's Dictionary (2008) Cambridge University Press.

Cambridge International Dictionary of English (1995) Cambridge University Press.

Concise Oxford English Dictionary (2006) Oxford University Press.

Longman Dictionary of Contemporary English, 4th Edition (2003) Longman.

Longman Advanced American Dictionary, 2nd Edition (2007) Longman.

Macmillan English Dictionary for Advanced Learners, 2nd Edition (2007) Macmillan.

New Oxford American Dictionary, 2nd Edition, The (2005) Oxford University Press.

Oxford Advanced Learner's Dictionary, 7th Edition (2005) Oxford University Press.

Oxford Dictionary of English (2006) Oxford University Press.

Oxford English Dictionary, 2nd Edition on CD-ROM Version 4.0 (2007), Oxford University Press.

Visuwords™ Online Graphical Dictionary (<http://www.visuwords.com/>)

『英語語義語源辞典』(2004)三省堂.

『英語多義語ネットワーク辞典』(2007)小学館.

『ジーニアス英和辞典 第4版』(2006)大修館.

『ジーニアス英和大辞典』(2001)大修館.

『小学館ランダムハウス英和大辞典』(1993)小学館.

『プログレッシブ英和中辞典 (第4版)』(2003)小学館.

『ロングマン英和辞典』(2007)桐原書店.